追手門学院大学地域創造学部紀要
2018 年 3 月 10 日，第 3 巻，1-14

# 追大ミツバチプロジェクトの考察
## ――「ソイル、ソウル、ソサイエティ」との つながりを取り戻すという視点で――

今　堀　洋　子

# Consideration of Honey Bee Project at Otemon Gakuin University : Perspective of Reconnecting with "Soil, Soul and Society"

Yoko IMAHORI

## 要　約

追大ミツバチプロジェクトは 3 年にわたり試行錯誤しながら継続的に活動を続けた。本論では、「つながり」ということに着目し、サティシュ・クマールが提唱している「ソイル（土）、ソウル（心）、ソサイエティ（社会）」とのつながりを取り戻すという視点で、追大ミツバチプロジェクトの 3 年間を考察した。

3 年間のプロジェクトを通じて明らかになったことは、当初は想定もしなかったような、様々なつながりを取り戻す役割を、ミツバチが担っていたということだった。

持続可能な社会に向かって、ソイル、ソウル、ソサイエティとのつながりを取り戻していくことが、求められている時代において、教育現場で、ミツバチプロジェクトを実践することの意義は大きく、秘めている可能性も大きい。続けていれば、それだけ、つながりを取り戻していくことができる。

プロジェクト型授業としてスタートした追大ミツバチプロジェクトは、プロジェクト型授業としては、3 年間で終了した。はたして追大ミツバチプロジェクトは、「独り立ちするだけのつながりを取り戻せたのか？」という真価が、今まさに問われている。

キーワード：追大ミツバチプロジェクト、ミツバチ、ソイル、ソウル、ソサイエティ、つながりを取り戻す、持続可能な社会、ジョアンナ・メイシー、サティシュ・クマール

## 1. はじめに

2000 年頃から、欧米で、ミツバチが失踪、消滅してしまう現象（蜂群崩壊症候群）が確認されて以来、その被害は、全世界に広がっている。結果として、世界中でミツバチが数を減らしており、大きな社会問題になっている。原因としてあげられているのが、農薬や、気候変動や、電磁波など、一つではないが、いずれもしても人間が起因していることは明らかである。そこで、原因となっていることを取り除き、ミツバチの数を増やしていこうという取組が世界中で行われている。筆者が 2015 年に、カリフォルニア州を訪問した際にも、訪れたどのガーデンにも、必ずミツバチの巣箱が置いてあり、ミツバチの蜜源の植物も植えられていた。そして、地域ぐるみで、ミツバチの数を増やそうという取組が見られた。

日本において、2006 年に発足した銀座ミツバチプロジェクトをはじめ、都市の屋上でミツバチを養蜂するという取組が広がっていった。きっかけは、「おもしろそう、楽しそう」ということであったが、上記の社会問題も追い風になったと思われる。2015 年には、ミシェル・オバマ元米大統領夫人がホワイトハウス内の家庭菜園でミツバチを養蜂しているのに触発され、安倍昭恵夫人が、公邸内で養蜂をはじめ、話題となった。

追手門学院大学でも、2014 年度より開講されたプロジェクト型授業として、追大ミツバチプロジェクトは発足し、3 年にわたり試行錯誤しながら継続的に活動を続けた。その活動を、振り返って考察しようとする際、どのような視点を用いるかは様々考えられる。それらは、環境教育やホリスティック教育などの教育的な視点であったり、ソーシャル・ベンチャーなどの経営的な視点であったり、地域創造的な視点などである。

本論では、その中で地域創造的な視点として、「つながり」ということに着目し、サティシュ・クマールが提唱している「ソイル（土）、ソウル（心）、ソサイエティ（社会）」とのつながりを取り戻すという視点で、追大ミツバチプロジェクトの 3 年間を考察することとする。

## 2. ソイル、ソウル、ソサイエティとのつながりを取り戻すという視点

### 2-1　筆者の問題意識

20 年程持続可能な社会や持続可能な暮らしの探求をしてきた筆者にとって、持続可能を阻害している大きな要因として、様々なものが「分断されている」ことであるということに行き着く。哲学者である内山節は、「共同体の基礎理論」の中で、かつての共同体は、家族同様、ひとつの社会であり経済を営む場であったが、近代社会誕生以来、それまで一体化されていた諸要素が、それぞれ独立し、独自の論理で展開するようになり、バラバラになったと述べている。

バラバラになってしまったものを、元に戻そうという動きは、いたるところで見受けられる。

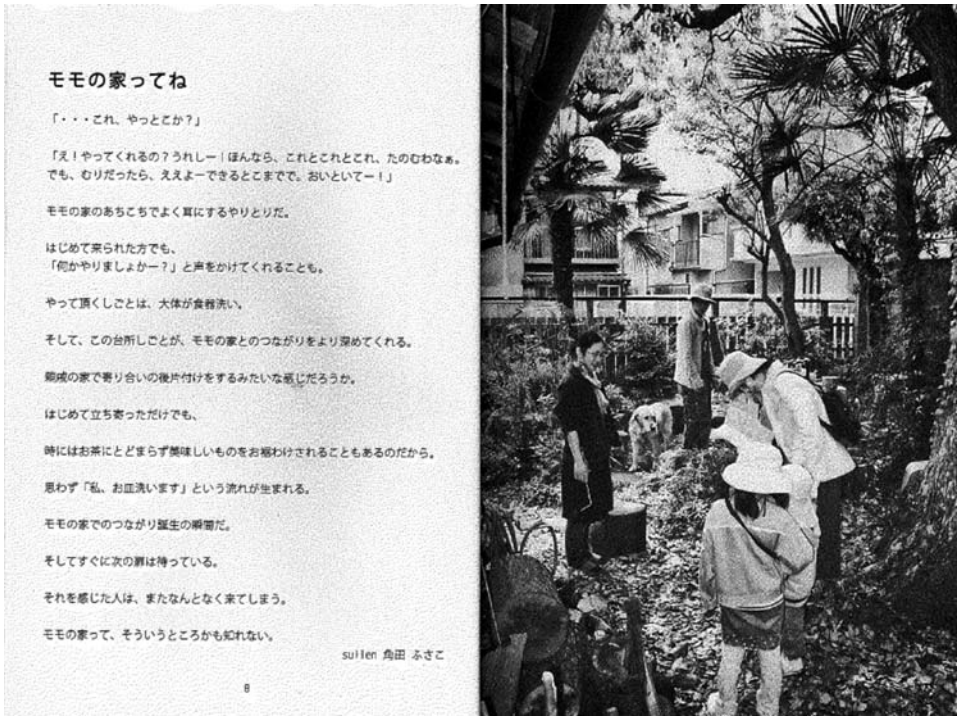



**図 1　つながりのなかではたらきまなびあそぶ　モモの家とは？**

筆者が運営に関わっている吹田市のモモの家[1]でも、「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」をかかげ、人と人のつながりに留まらず、人と自然とのつながり、都市と田舎のつながりなどの活動を、20 年以上続けている（図 1 参照）。

### 2-2　ジョアンナ・メイシーの「つながりを取り戻すワーク」

ジョアンナ・メイシーは、米国カリフォルニア州のバークレーに在住の仏教哲学者で社会活動家である。彼女は、仏教、一般システム理論、ディープ・エコロジーを深く学び、50 年以上に及ぶ平和、社会的公正、環境分野における活動家としての経験とそれらの学識を統合して、「つながりを取り戻すワーク」という、個人的および社会的な変容をもたらす理論的枠組みとそれを現実で実践するための効果的なワークショップ手法を生み出した。

「つながりを取り戻すワーク」は、1970 年代後半にジョアンナによって開発されたものだが、その後、関わる人々の意見を取り入れながら進化して拡がり、言語、宗教、背景、年齢が異なる何十万人もの人々がワークショップに参加してきた。このワークは、我々が人とのつながりや、より大きな生命の織物とのつながり、あるいは過去や未来の人々とのつながりを取り戻すのを助けるので、「つながりを取り戻すワーク」と呼ばれている。

「つながりを取り戻すワーク」は、スパイラル（螺旋）構造になっており、4 つのステージで




**図2**「つながりを取り戻す　ワーク」のスパイラル

構成されている。それらは、「感謝の気持ちを感じる」「世界に対する痛みを大切にする」「新しい目で観る」「前に向かって進む」である（図2参照）。ジョアンナは、このステージを通過する過程を繰り返すたびにその効果が深まっていくと述べている。

「感謝の気持ちを感じる」と我々は、生命に満ち溢れた驚嘆すべきこの世界に自分が生きていることの素晴らしさや、我々が受け取る数々の贈りものや美しいものに、よりいっそう意識を向けるようになる。そして、そのことが、起こりつつある大規模な破壊や略奪、崩壊に気づかされることとなり、自然と「世界に対する痛みを大切にする」ことにつながる。そして、感謝の気持ちを感じることが、2つめのステージで辛い現実に立ち向かう我々を支える。ここで世界に対する痛みを大切にすることに集中する時間を持つことで、この世界に起こっていることへの反応として湧き上がる、苦しみや、悲しみ、怒りなどに耳を傾けるスペースを確保することができる。そのことで、我々は苦悩を押し殺すタブーを打ち破り、心の中の警報器が正常に作動し、自分達の中で、あるスイッチがオンになる。そして、3つめのステージでは、我々のものの見方はさらに変化して、世界に対して痛みを感じるのは、「私たちが大きな生命の一部であることの健全な表れである」と認識できるようになる。そのように、より深い「エコロジカル・セルフ」にしっかりと根を下ろすことで、生命の織物を通してつながったより多くの存在から助けを得ることができるということが、新しい目で観るとわかる。そして、4つめのステージでは、世界を癒すために自分にはどんなことができるかというビジョンを明確にし、そのビジョンを実現するための具体的なステップを明らかにする。

このスパイラルは、「我々に地球上のすべての生命のために行動する能力を高める変容の旅をもたらしてくれる」と、ジョアンナは語っている。

### 2-3　サティシュ・クマールが提唱する「ソイル、ソウル、ソサイエティ」

「我々は、一体何とのつながりを取り戻す必要があるのだろうか？」、それに示唆を与えてくれ



**図3　京都にサティシュをお迎えして（2010年9月11日撮影）**

るのが、インド生まれで、イギリス在住の思想家で平和活動家であるサティシュ・クマール（図3参照）である。

サティシュは、ヒンドゥー教の聖典のひとつである「バガヴァッド・ギーダー」（神の詩）に、我々は日々、生活の中で、自然と社会と自己の側面に気を配る必要があると説かれていることを思索の糧とし、現代の三位一体として、「ソイル（土）、ソウル（心）、ソサイエティ（社会）」を提唱している。これまで、人間の大志はしばしば三位一体の形で表現されてきている。例えば、「父と子と精霊」はキリスト教のビジョンに霊感を与え、「自由、平等、博愛」はフランス革命を突き動かし、「マインド、ボディ、スピリット」は、ニューエイジの運動の核心となった。サティシュが、「エコロジーの時代」と呼ぶ時代において、「ソイル、ソウル、ソサイエティ」は、真の全体的な考え方を啓発することができ、自然と人間と精神性を1つに結びつけることができると、サティシュは述べている。

まず、「ソイル（土）」であるが、我々は土から生まれ土に還る。我々の食べ物や日々の栄養は土から育ち、家を建てるために使う材料、衣服のための綿や羊毛、石油や石炭、木材などの燃料もすべて、土によってもたらされている。土は地球を象徴し、生命を与え、空気や火や水を宿す。我々の暮らしは土に依存しており、土は生命の象徴である。

自然を育てることの次には社会「ソサイエティ」を育てることがくる。それは、「与えることと受け取ること」に基づいた社会の秩序を意味し、相互利益と相互関係を意味する。我々は知的、文化的、宗教的財産を使って人生を豊かなものにする。これらの財産は何世代にもわたって蓄積されたものである。我々はこのように伝統という宝を無償の贈り物として受け取っているのであるから、そのお返しに、我々も自分の仕事や創造性、芸術や手仕事、農業や建築を、社会の今と未来の世代に対する贈り物として差し出すのである。このようにして、「ソサイエティ」は育っていく。

ソイルとソサイエティに補給し活力を与えたように、我々はソウル（心）にも補給し活力を与える必要がある。心を大事にしなければ、土や社会を大事にすることはできない。我々の心は、怒りにより、またあるときは貪欲により、疲弊し傷ついている。不安や恐れも心を痛める。心が無傷になり満たされるためには、我々は自分の心を癒す必要がある。心を癒すためには、孤独になること、断食すること、あるいは少なめに食べること、足るを知ることなどが有効であるとサティシュは述べている。

ソイルとソウルとソサイエティに補給し活性化することは、エコロジーの時代に求められてい

ることである。けれども、これら 3 つは個別に扱われるべきではなく、互いに補い合い、全体を作り上げるもので、一緒に取り上げられるべきである。というのも、この三位一体には全体性が内在しているからだともサティシュは述べている。

## 3. 追大ミツバチプロジェクト

### 3-1　追大ミツバチプロジェクトが発足した経緯

追手門学院大学において、2014 年度より、正課の基盤教育科目として、プロジェクト型授業が開講されている。これは、教室内で行なわれる座学型の講義とは異なり、学生達がチームとなり、地域や社会にある課題の解決や、新たな価値の創出に主体的に取り組む PBL：プロジェクト・ベースド・ラーニング型の科目である。2014 年度、追大ミツバチプロジェクトも、そのうちの一つとして採択された。

ミツバチプロジェクト発足の経緯は、更にそこから数年さかのぼる。2000 年頃から、世界中で、蜂群崩壊症候群（Colony Collapse Disorder, CCD）という、ミツバチが原因不明に大量に失踪する現象が報告されるようになり、人々が、ミツバチに対する関心を寄せるようになった。そして、日本においては、昔から日本の山野で自生してきたニホンミツバチへの関心も高まっていった。そんな時、追手門学院大学のキャンパスが所在する安威の集落にある、ムクのご神木の洞に、野性のニホンミツバチの一群が生息していることを筆者が発見した（図 4 参照）。そこで、このニホンミツバチの群が春に分蜂（巣別れ）する時に、分蜂した群の新たな住処として、大学キャンパス内に巣箱を設置し、ニホンミツバチの養蜂をスタートすることを企画したのである。



**図 4　ニホンミツバチが生息していた追手門学院大学キャンパス近くのムクのご神木（2014 年平田真帆さん撮影）**

追大ミツバチプロジェクトは 2014 年度から 2016 年度まで、3 年間にわたって、継続的に実施された。毎年異なるメンバーで、様々な試みをした。次節からは、年度毎にその内容について記述していく。

### 3-2　1 年目（2014 年度）の追大ミツバチプロジェクト

プロジェクトメンバーは、応募してきた 60 名の中から、選抜し、学部横断（心理、経営、経済、国際教養、社会）で、2 回生から 4 回生の総勢 20 名となった。

ニホンミツバチは、毎年春になると分蜂する。プロジェクトでは、分蜂した群を、捕獲することから始めた。4 月上旬、プロジェクトの初回に、ニホンミツバチが生息しているムクのご神木から 5 メートルほどの距離にある納屋に、待ち箱を設置した。その際、京都学園大学の坂本文夫氏（元教授、現在名誉教授）らが開発したキンリョウヘンの誘引成分に基づくニホンミツバチ分蜂群誘引剤を用いた。

5 月から 6 月にかけて、1 群ずつ 2 群を捕獲することに成功し、捕獲と同時に、キャンパス内に移した。そして、メンバーが交代で、日々、ニホンミツバチの見回りと観察を始め、メンバー間で共有した。図 5 に観察の記録の一例を示す。

2 群とも順調にミツバチの数が増えていたが、蜂児捨ての現象が頻繁に観察されるようになり、8 月に入ると立て続けに 2 群とも、逃亡してしまった。巣箱の中に、スムシの幼虫も多く発見されたので、スムシを嫌がって逃亡してしまったのかもしれないが、原因は不明である。

プロジェクト開始当初から、学生の発案で、追大ミツバチプロジェクトの FB を立ち上げて、活動報告をしていた。それがきっかけとなって、11 月に名古屋学院大学で開催された学生ミツ

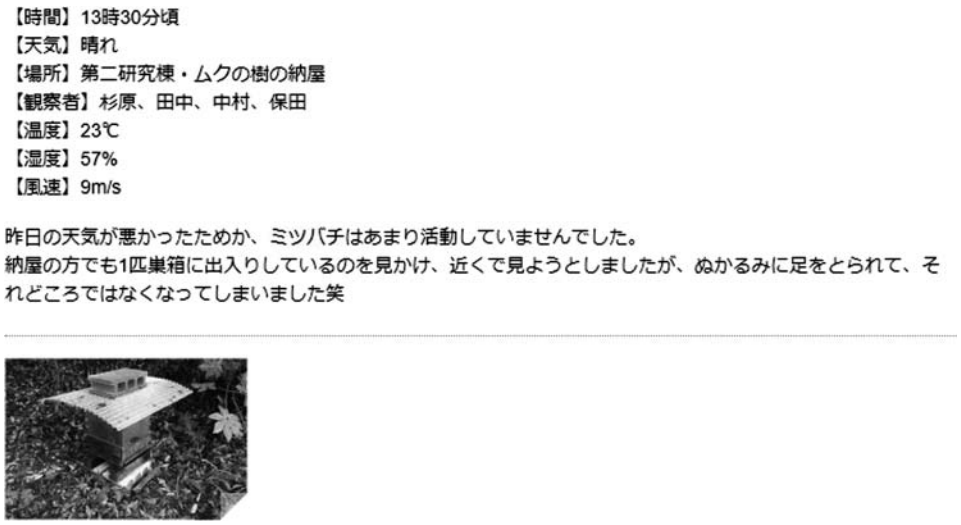



**図 5　プロジェクトメンバーによるニホンミツバチの見回りと観察記録（2014 年 5 月 21 日）**



**図 6　茨木市里山センターでの重箱の巣箱づくり（2014 年 12 月 18 日）**

バチサミットに参加した。サミットでは、銀座ミツバチプロジェクトを立ち上げた田中淳夫氏の基調講演があり、全国から、ミツバチの養蜂をしている高校と大学の関係者が集まり、活動報告がされた。交流会では、専門家から、ニホンミツバチが逃亡してしまったことへのアドバイスとして、いきなりハードルの高いニホンミツバチからではなく、まずは、セイヨウミツバチから始めてみることを勧められた。

12 月には、次の春に備えて、重箱式の巣箱を 3 箱作成した。その際、大学近くにある、廃校となった大阪府立春日丘高校泉原分校を再利用した施設である茨木市里山センターで、里山・森林整備に取り組んでいる地元の方々に指導していただいた。巣箱の部材は、大阪の杉の木を活用した。図 6 の写真は、その時の様子である。

### 3-3　2 年目（2015 年度）の追大ミツバチプロジェクト

2 年目のプロジェクトは 12 名で開始された。2014 年の秋に、ご神木のムクの木の洞にあったニホンミツバチの巣も、オオスズメバチにやられてしまったため、分蜂の時期のミツバチの捕獲作戦は難航した。ミツバチが好みそうな場所数か所に誘因剤をつけた待ち箱を設置したが、結局、どの巣箱にもミツバチは入らなかった。

プロジェクトを存続するために、6 月にそれまでの方針を変更し、セイヨウミツバチを、埼玉



**図 7　2015 年度のプロジェクトの様子（左から「セイヨウミツバチがやってきた」、「親子まちづくり塾でのハチミツの試食」、「四天王寺での内検」）**

の養蜂場から購入した。それ以降、毎週、内検（女王蜂、卵や幼虫の様子、働きバチ達の様子、蜜のたまり具合などの確認をする）を開始した。

ミツバチの最大の天敵は、オオスズメバチである。8 月のお盆を過ぎたあたりから、オオスズメバチの襲撃を受け始めた。巣門に取り付けた捕獲器に、毎日、10 匹を超えるオオスズメバチが入った。プロジェクトとしては、オオスズメバチとの格闘をする日々が続いた。

その一方、2 年目に入り、プロジェクトを紹介する事も増えていった。茨木市主催の親子まちづくり塾で、ミツバチのワークショップを、春と秋に 2 回開催した。春には、学生達が作成したミツバチの紙芝居の披露や、ミツバチについてのミニ講座を開講し、実際にミツバチの養蜂の現場の見学も盛り込んだ。また、ミツバチの蜜源の植物の紹介をした上で、茨木市内の蜜源の植物とミツバチを発見したら、その場所を記録しておくということを次回までの宿題とした。秋には、それらの情報を持ち寄り、茨木市内の蜜源とミツバチマップを作成した。加えて、巣の一部を取り出し、その構造の紹介と、そこに貯蔵されている蜜を試食してもらうこともした。

冬になり、オオスズメバチの攻撃に加えて、ダニの発生も見られ、ミツバチの数が激減してしまい、一群では冬を越せない状態に陥った。急遽、梅田ミツバチプロジェクトに助けを求め、冬の間、四天王寺の境内で、梅田ミツバチプロジェクトのミツバチの群と共に、共同飼育をしていただくこととした。この間、毎週、追大プロジェクトメンバーも四天王寺に通い、養蜂家や梅田ミツバチプロジェクトのメンバーから、直々にセイヨウミツバチの養蜂の指導を受けた。

以上紹介してきた 2015 年度のプロジェクトの活動の様子を、図 7 の写真で示す。

### 3-4　3 年目（2016 年度）の追大ミツバチプロジェクト

3 年目は、冬の間、梅田ミツバチプロジェクトに預けて管理していただいた巣箱を、キャンパス内に戻すことから始めた。そして、キャンパスの近くにお住まいで、趣味で養蜂をされている浅井さんの 2 群とあわせて、3 群での共同飼育を試みた。

5 月には、安威小学校の 5 年生を招待し、ミツバチのワークショップを開催した。そして、6 月 4 日には、プロジェクト初の採蜜をすることができた（春蜜）。続けて 7 月 31 日は、2 度目の採蜜を行った（夏蜜）。

8 月のお盆過ぎから、オオスズメバチの攻撃を受け始めた。捕獲機や、ネズミ捕りシート、昆

虫網などの駆除に加えて、巣箱全体を網で覆う対策もとった。

9 月に入り、ハチミツのお披露目に向けての作業を開始した。採蜜したハチミツを、キャンパスが所在する地名の安威から「あいみつ」と名付けた。ラベルをつくり、100 ml の瓶に瓶詰をしていった。

10 月 31 日には、プロジェクトメンバーで、安倍昭恵夫人を首相公邸に訪ねた。「あいみつ」を届け、ミツバチ談義をさせていただき、公邸の中庭に置いてあるニホンミツバチの巣箱とハチの様子を見学させていただいた。翌日は、玉川大学のミツバチ科学研究センターを訪ね、センターでの取り組みについて話をうかがう機会を得た。

11 月の学園祭では、「あいみつ」の大々的なお披露目の場になった。一つ 500 円で販売したが、2 日間であっという間に完売するほどの人気の高さだった。他にも、大阪市の生涯学習センターの市民まつりなどでお披露目した。また、サンケイリビングのリビング新聞の創刊 45 周年記念チャリティー企画「リビング北摂 45th ほくほく袋」として、春蜜と夏蜜のセットで 20 組の「あいみつ」をギフトとして提供する機会にも恵まれた。

11 月に入り、女王バチが卵を産まなくなり、ミツバチ達が次第に数を減らしていった。結果として、群として冬越えをすることができなかった。

以上紹介してきた 2016 年度のプロジェクトの活動の様子を、図 8 の写真で示す。尚、2016 年度のプロジェクトの活動について、詳しくは、「追手門学院大学 2016 追手門学院大学北摂総合研究所　北摂総合研究所報　第 1 号」に記載している。



**図 8　2016 年度のプロジェクトの様子（上段：左から「浅井さんと共同飼育の様子」、「安威小学校の 5 年生のミツバチワークショップ」、「初の採蜜」、下段：「あいみつ」、「昭恵夫人訪問」、「学園祭でのお披露目」）**

## 4.「ソイル、ソウル、ソサイエティ」とのつながりを取り戻すという視点でのふりかえり

この章では、前章で述べてきた追大ミツバチプロジェクトが、2 章で紹介したサティシュ・クマールが提唱している「ソイル、ソウル、ソサイエティ」に関して、どれだけつながりを取り戻せたかという視点でみていくことにする。

### 4-1 「ソイル」とのつながりを取り戻すという視点

サティシュは、「ソイル（土）」は、生命そのものであり、土は地球そのものであると述べている。ミツバチ自身も生き物であり、自然であり、ソイルから生まれる命である。

第一に、ミツバチの養蜂をするということは、ミツバチを観察し、そのお世話をすることがで、我々は、自然とつながることになる。ミツバチの生態を知れば知るほど、その神秘さ、目の前の小さな生き物が、健気に、蜜や花粉を集めてきて、女王バチや卵や幼虫のお世話をし、敵が入らないようにみはり、巣の中をいつも清潔に保つということをしていることに驚く。

第二に、ハチミツという自然の恵みを、採蜜することができるのである。ミツバチプロジェクトは、3 年目にして、ようやく本格的な採蜜ができたこともあり、収穫の喜びはひとしおであった。採蜜（収穫）することにより、自然とのつながりを取り戻したといえる。

第三に、ミツバチの蜜源の植物への関心も高まった。樹々や草花を目の前にした時に、ミツバチの蜜源であるかどうかの知識が増え、ミツバチ達がいないかどうかを観察するようになった。そして、ミツバチガーデンという企画も誕生し、ミツバチ達が住みやすい環境を整えるために、蜜源の植物や樹木を植えるというアクションもおこした。ミツバチ達のおかげで、植物との距離も縮まったといえるだろう。

### 4-2 「ソウル」とのつながりを取り戻すという視点

「ソウル（心）」を大事にし、ソウルとのつながりを取り戻すということは、まずは、自分自身と向き合い、自分自身を知り、自分の自己価値を高めることともいえる。このことは、人間を全体的にとらえようする、ホリスティック教育(2)の目指すこととも通じ、その人の中に本来そなわっているものを引き出すことでもある。

第一に、プロジェクトメンバーのセンス・オブ・ワンダー（自然の美しさに目をみはる感性）を引き出すことができた。このプロジェクトの広報ビデオ作成のための取材の際、心理学部の女子学生が、「私は、ミツバチの養蜂に関わることで、ミツバチ達が、こんなにきれいなハチミツを私たちに与えてくれるんだということを始めて知った。しかも、あんなに小さい体で、あれだけたくさん量の蜜を集めてくることにとても驚いた。だから、私達はハチミツを、ミツバチ達に感謝していただかないといけない。」とコメントしている。




**図 9**　プロジェクトによって引き出されたメンバーのアートの感性

第二に、プロジェクトメンバーのアートの感性も引き出すことができた。追大ミツバチプロジェクトは、プロジェクトの宣伝や、ハチミツを実際にお披露目するために、ラベル、チラシ、メンバーの T シャツなどを作る機会があった。それらは、全て、複数のメンバーが手がけた（図 9）。「あいみつ」の手書きのラベルは、とても好評で、「あいみつ」が注目されるきっかけとなった。また、活動の写真や動画を撮り、FB をはじめとするネット上にアップして公開した。

第三に、プロジェクトメンバーは、ミツバチと身近に接すること、オオスズメバチと対峙すること、ハチミツを味わうことなど通じて、彼らの五感の刺激となり、結果として五感を磨くこととなった。ミツバチ達が集めてきたハチミツは、キャンパス内に設置されている巣箱から半径 2 キロ圏内で、その時期に咲いている草や樹木の花の蜜である。6 月 4 日と 7 月 31 日の 2 回、採蜜したので、それは、それぞれ、キャンパスのある安威の地域に咲く花々の「春の味」（春蜜）と夏の味（夏蜜）となった。そして、地域の季節の花々を味覚で味わうことができた。更に、味覚だけでなく、見た目（視覚）も、香り（臭覚）も、春蜜と夏蜜では異なっていたので、その違

いを、感覚でとらえることになった。また、ミツバチの最大の天敵であるオオスズメバチと対峙することにより、大げさな言い方をすれば、命の危険も伴うため、正しい知識も身に付けつつ、彼らの危険センサーも発動させることとなった。

### 4-3 「ソサイエティ」とのつながりを取り戻すという視点

3 年間のミツバチプロジェクトは、開始した当初は、想像もしていなかったようなつながりを含めて、たくさんの「ソサイエティ」とのつながりを生み出した。

第一に、大学内でのつながりが広がった。メンバーが学部も学年も違うがプロジェクトを通じて仲間となった。更に、広報の職員の方々をはじめ、様々なつながりもできた。

第二に、地域内でのつながりもできた。キャンパス近くの安威小学校の 5 年生に向けてのミツバチワークショップを 2 回開催し、メンバーの学生達が、小学生にミツバチに関する授業も実施した。また、地域で養蜂をされている方とのつながりもでき、3 年目は共同飼育をすることができた。加えて、茨木市役所の都市政策課の方も、関心を寄せてくださり、ミツバチをテーマとしたワークショップを、2 年目と 3 年目の 2 年にわたって開催した。その結果、茨木市民の方々にも、ミツバチやプロジェクトのことを発信することができ、茨木市の市民の方々ともつながりが持てた。

第三に、養蜂をしている方々とのつながりをもつことができた。学生ミツバチサミットを通じて、名古屋学院大学の教授や、銀座ミツバチプロジェクトを立ち上げた方や、京都産業大学のミツバチの研究者や、京都学園大学の研究者や、京都の伏見で養蜂をされている方や、梅田ミツバチプロジェクトの方々ともつながった。そして、玉川大学のミツバチ科学研究センターの教授ともつながった。また、長年能勢高校で、養蜂をされている先生ともつながることができた。

その他にも、安部昭恵夫人や、ハチミツの販売されている方、ミツバチの養蜂やハチミツに関心を寄せられている方々など、ネットを通じても含めて、つながりは加速度的に広がっていった。

## 5. 結びにかえて

ミツバチは、蜜や花粉を求めて花から花へ飛びまわる際に花粉を身体につけて運び、自力で移動できない植物にかわってその交配を助ける「ポリネーター（花粉媒介者）」である。つまり、植物と植物との結びつける役割を担っている。そんなミツバチは、植物だけでなく、人と自然（ソイル）、人と人（ソウル）、人と社会（ソサイエティ）をつなげる役割も果たすのだということが、3 年間のプロジェクトを通じて明らかになった。

持続可能な社会に向かって、ソイル、ソウル、ソサイエティとのつながりを取り戻していくことが、求められている時代において、教育現場で、ミツバチプロジェクトを実施することの意義

は大きく、秘めている可能性も大きい。続けていれば、それだけ、つながりを取り戻していくことができる。

プロジェクト型授業としてスタートした追大ミツバチプロジェクトは、プロジェクト型授業としては、3 年間で終了した。プロジェクト型授業という仕組みの中では、経済的にも、学生メンバーを募るという意味でも、人的サポートという意味でも、広報という意味でも、様々な支援を受けてきた。当たり前のこととして見落としがちだが、それらの支援も「つながり」だという見方もできるだろう。はたして、追大ミツバチプロジェクトは、「独り立ちするだけのつながりを取り戻せたのか？」という真価が、今まさに問われている。

**註**

⑴　モモの家　大阪府吹田市にある古い古民家をコミュニティスペースとして、有志が会員となって運営している。「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」を合言葉に、日々の暮しを丁寧に、昔からの知恵を活かしながら、都市と田舎をつなぐ取組や、身体や心のこと、未来世代のこと、お金やエネルギーのことを考えるワークショップや勉強会なども開催している。詳しくは、モモの家の HP、http : //www.momo-family.org/ など参照。

⑵　ホリスティック教育とは、人はみな、地域や自然界との関わりを持ち、思いやりや平穏などの精神的価値観を追い求めることで、自己の存在証明、人生の目的や意味を見出していくという考え方に基づいて行われる教育のことである。ホリスティック教育は、人々の内に秘められている命への尊厳と、学ぶことに対する大きな喜びを引き出していくことを目指している。詳しくは、高橋史朗著、感性を活かすホリスティック教育（モラロジー研究所出版、2004 年）など参照。

**参考文献・参考サイト**

Joanna Macy, Chris Johnstone : Active Hope : How to Face the Mess We're in without Going Crazy, New World Library, 2012.

Satish Kumar : You Are Therefore I Am : A Declaration of Dependence, Uit Cambridge Ltd ; 1st, 2004.

Rowan Jacobsen, Fruitless Fall : The Collapse of the Honey Bee and the Coming Agricultural Crisis, Bloomsbury Pub Plc USA, September 2008.

内山節：共同体の基礎理論、農文協、2015 年

追手門学院大学の HP　プロジェクト
https : //www.otemon.ac.jp/career/student/project.html（2018 年 1 月 10 日）

キャンパスでハチミツが採れました！～追手門学院大学ミツバチプロジェクトの動画
https : //www.youtube.com/watch?v = SWbrdBr34GQ（2018 年 1 月 10 日）

サティシュ・クマール：君あり、故に我あり　依存の宣言、講談社学術文庫、2007 年

坂本文夫ら：キンリョウヘンの誘引成分に基づくニホンミツバチ分蜂群誘引剤、日本環境動物昆虫学会、第 25 巻　第 1 号：45-47（2014）

ジョアンナ・メイシー＋クリス・ジョンストン：ACTIVE HOPE、春秋社、2015 年

suilen：つながりのなかではたらきまなびあそぶ、ユニウス、2011 年

2018 年 1 月 11 日受理